

配置薬に使用される生薬の特徴⑥

村上 守一

センキュウ(川芎)

Cnidium officinale Makino (セリ科 *Umbelliferae*)

『神農本草経』(漢代)の上品に芎藭の名で収載され、「中風が脳に入って頭痛、寒痺筋攣緩急、金瘡、婦人の血閉、不妊を主どる」と記されています。『本草綱目』(1590)に「芎の字の意義は詳かではない。……この薬は上行して専ら頭脳の諸疾を治するものだから芎藭なる名称があるのだといふ」と語源を解説しています。川芎についても「蜀中に産するものを川芎と呼び…」とあり、四川省産が良品であるところから四川の川を取って川芎と呼ばれるようになったと述べています。

日本には寛永年間に中国から長崎に渡来し、大和地方で多く栽培されました。19世紀半ばには東北地方に、明治時代の後半には北海道に移入され栽培されるようになり、主産地となっています。富山県内でも浴湯料としての需要があった頃に多く栽培されましたが、現在では価格の低迷に伴い少量の栽培しかありません。

日本産の川芎は「日芎」とも呼ばれ、局方ではハマゼリ属(*Cnidium*)を原植物しています。これは飯沼慾齋があらわした『草木図説』(1856)に所属未考として載せられているものについて牧野富太郎氏が命名したものです。しかし、中国に日本産川芎の原種が存在しないことやセリ科の植物が果実の形態で分類することが多いため、果実を付けないセンキュウは分類が難しく、マルバトウキ属(*Ligusticum*)やミヤマセンキュウ属(*Conioselinum*)に分類されることがあります。中国においても混乱があり、以前はミヤマセンキュウ属とされていましたが、現在はマルバトウキ属の *Ligusticum chuaxiong* Hort. を当てています。中国産川芎は葉が細くより深裂し、根茎の形状にも多少違いがあり、精油組成も違ってきます。

植物の特徴

比較的寒冷地を好む植物で、草丈は30~60 cm、根出葉は叢生し、長い葉柄があり、大型で茎は円柱形、茎生葉は互生します。2~3回羽状複葉で小葉は卵状被針形、中裂または深裂する鋸歯があります。植付けから2年目以降になると秋に複散形花序を頂生し、多数の小花を開く株もあります。



センキュウ

生 薬

秋に掘上げ、細根を取除き、半乾燥後虫害防止のため 70～80℃のお湯に 5～10 分浸し、乾燥します。外面が暗褐色で内面が黄褐色、半透明、質が重く、強い臭いと味のあるものが良品。

成 分

フタライド系精油（1～2%）：クニジリド、ネオクニジリド、リグスチリド、センキュウノリドA～J、ブチルフタリド等。

薬効および使用法

補血、強壯、鎮静、鎮痛薬として貧血、月経不順、冷え症、生理痛、頭痛を目的に葛根湯加川芎、響声破笛丸、十全大補湯、疎経活血湯、当帰芍薬散、防風通聖散等漢方処方に配合される他、婦人薬とみなされる処方に配合されます。